

★2012年度第16回総会・大会が開催されます

第16回の大会は2012年10月12日金曜日、中京大学にて開かれます。今回の大会の基調テーマは、すでに会誌11号でお知らせしたように、マーク・トウェインと子どもたちとなりました。トウェイン研究の王道を行くかのごときテーマですが、1961年出版のAlbert E. Stone の名著 *The Innocents Eye* 以来、同テーマを中心に据えた研究書はあまり記憶にございません。それだけに新鮮な議論に期待が膨らみます。また今年は例年を上回る3名の研究発表もごございます。楽しみにしててください。

第16回総会・大会プログラム

10月12日(金)

中京大学名古屋キャンパス2号館1階、212教室

(会場へのアクセスはこちらのURLをご覧ください)

<http://www.chukyo-u.ac.jp/information/access/index.html>

13時00分より **総会**

13時45分より **大会**

研究発表 (予定: 13:45~15:15)

1. 大宮健史 司会 宇ノ木寛文 (熊本高等専門学校 准教授)
マーク・トウェインとトリックスター——「ハドリバークを墮落させた男」を中心に
2. 田村亮 (早稲田大学・非) 司会 三石庸子 (東洋大学 教授)
知と知の衝突——『まぬけのウィルソン』考
3. 齊藤弘平 (青山学院大学・院) 司会 武藤脩二 (中央大学 名誉教授)
Mark Twain Meets William James——トランスパーソナルな心理学とそのジレンマ

シンポジウム 「マーク・トウェインと子どもたち」 (予定: 15:30~17:30)

司会・講師 江頭理江 (福岡教育大学)

講師 三浦玲一 (一橋大学)

大串尚代 (慶應義塾大学)

久保拓也 (金沢大学)

18時00分より **懇親会**

中京大学名古屋キャンパス0号館 センタービル2F プレジール

会費 一般6000円 学生4000円

研究発表シノプシス

マーク・トウェインとトリックスター ——「ハドリバークを墮落させた男」を中心に

大宮健史

「ハドリバークを墮落させた男」のストレンジャーは復讐心に燃えた「サタン」であるという見方と、町の人々の皮肉な「救済者」であるという相反する見方がある。町の名声を傷つけるという悪意ある役割を演じ、かつ、非意図的であるが、町の精神的再生の機会を与え、救済者の役割を果たす点で、ストレンジャーは「トリックスター」だと言えよう。トウエインの人間性にも二重性が見られるが、このような二重性こそトリックスターの精神の特徴である。ストレンジャーはその多面性を通じて、現実と見せかけ、真実と虚偽、完全と不完全、道徳と不道徳、長所と短所が、複雑に絡むこの世界を現出する。ストレンジャーは虚栄、貪欲、偽善などがハドリバークの人々にも存在することを暴露し、町の人々に対する一面的で皮相な理解を否定する。本発表ではストレンジャーのトリックスター的側面を考察する。そして、トウエイン独自のユーモラスな道徳理論がこの物語のプロットの形成に関係しているのではないかという点にも論及する。

知と知の衝突——『まぬけのウィルソン』考

田村亮（早稲田大学・非）

シェリー・フィッシャー・フィッシュキンらが述べるように、マーク・トウエインの女性登場人物の中でも注目すべきが、『まぬけのウィルソン』のロクサーナである。強い主体性の持ち主ロクシーはトウエインのその他の女性登場人物とは一線を画す。その前に立ち上がるのが弁護士ウィルソンである。過去の失言により村の人から馬鹿にされるウィルソンをロクシーだけは冒頭から常に警戒している。臨機応変に知恵を働かせ、息子の窮地を救う彼女だったが、結果、その危惧は現実のものとなる。考えてみれば、ウィルソンの失言自体も意味深長で、彼もロクシーに劣らずなかなかの知恵者である。私には、それぞれに魅力的な登場人物であり、この二人のぶつかり合いがこの小説に緊張感をもたらしているように思える。本発表では、ロクサーナ、ウィルソンの知恵をテーマに、両者の言動を細かく辿り、その役割、特徴を明らかにすると同時に、二人の衝突と物語の展開・結末の意味にも迫れればと思う。

Mark Twain Meets William James——トランスパーソナルな心理学とそのジレンマ

齊藤弘平（青山学院大学・院）

1900年前後からMark TwainとWilliam Jamesが知己となったことは伝記的な事実としてよく知られてはいるが、一体このそれぞれ既に高名であった小説家と心理学／哲学者の間に、どのような「知」の影響関係の線を結ぶことができるだろう？ 男性性、反帝国主義、健康と自己陶冶など、様々なテーマを両者の交錯から引き出せるのだが、本発表では両者が感傷主義化された文化のフレームワークの中で New Thought 及び Spiritualism にも大

いに理解と親和性を有しながら、同時代的な「意識」(mind)への理解を共有し育んでいたこと、加えてそのような共通知がもたらしたジレンマについて論じたい。

世紀転換期アメリカのパラダイムにおいて、「意識」は個別的に内属する閉じられた一個の自我としてではなく、共感、交信、暗示が起こりうる開かれたものであり、集合的でトランスパーソナルな領域として理想化されることが多かった。しかし、そのような発想は、個人主体の独立や自律というもう一方のアメリカ的な理想を脅かすものともなる。従って、Twainにも James にも、その著述の中に自己とその「意識」を巡ってのジレンマが如何ともしがたく生じている。Twainの短編 “Mental Telegraphy” や “My Platonic Sweet Heart” などを、Jamesの心理学や心霊研究の著作と照らし合わせながら、この事態を見てみたいと思う。

シンポジウム「マーク・トウェインと子どもたち」シノプシス

「マーク・トウェインと子どもたち」は、一見どんぴしゃりのテーマである。『ハックルベリー・フィンの冒険』や『トム・ソーヤの冒険』があまりに有名な国民的作家トウェインを扱うテーマとしては、はまりすぎている印象がある。しかしながら、トウェインの子どもたちが容易に本性を見せてくれないことも、皆さんまたよくご存じのとおりである。そしてもちろんトウェインの描く世界が「子ども」にかかわるものばかりでないのも承知の上である。

今回のシンポジウムはその一見はまりすぎたテーマに4人で果敢に挑戦する。大串氏は19世紀のこども像と『トム・ソーヤ』との関連から、久保氏は子どもと障害の視点から、三浦氏は児童文学の切り口から、そして江頭氏は姿を変える子どもたちのテーマから、切り込んでいく。それぞれの立場で「トウェインと子どもたち」のテーマを包囲してしまいたいと考えている。このように包囲したとき、トウェインはきっと何かしらのメッセージを発してくれるはずであると信じている。

姿を変える子どもたち

福岡教育大学 江頭理江

「マーク・トウェインと子どもたち」、取り扱いやすそうで、実はとても難しいテーマである。ハックルベリー・フィンとトム・ソーヤがあまりに有名なキャラクターであるトウェインの作品世界は、子どもこそ中心テーマの一つであると容易に言い切ってしまうがちである。しかし、トウェインがハックの物語を大人に宛てて書いたとき、すでにトウェインの「子ども」は複雑な様相を帯びていたのである。

ハックは、状況に応じて姿を変える、一筋縄ではいかないキャラクターである。彼は、女の子に姿を変え、ジョージ・ジャクソンに姿を変え、最後にはトムを装う。ハックのみならず、トウェインの「子ども」はしばしば姿を変える。『王子と乞食』において、乞食

のトムと王子のエドワード・チューダーは入れ替わり、「間抜けウィルソン」において、奴隷の子供チェーンバースと白人の子供トムは取り替えられる。

トウェインの作品世界では、イノセントな子どもが、時に姿を変え、素性を偽り、他人を騙す。このように「姿を変える子どもたち」に注目し、そこから読み取れるトウェインのメッセージについて分析を行う予定である。

アメリカ文学における「帝国主義」？

一橋大学 三浦玲一

『ハック・フィン』は児童文学かという問いから、「児童文学」とはなにかということを考えたい。一九五〇年代に偉大なるアメリカ小説となると、この小説は児童文学でなくなる。だからと言って、発表当時は、純文学ではなくて児童文学だったというわけでもない。あえて言えば、その両方だった。キャンノン化の五〇年代においても事情はある意味似ていて、レスリー・フィードラーが“good bad boy”の系譜にこの小説を位置づけるとき、そこで依拠されるのは、ある種の児童文学史である。この小説の評価の歴史を、この小説が子供向けではないことをいかに説明するかという手続きの繰り返しとして考えるとき、排除されていくのはトウェインの「ユーモア」であり「悪意」である——イノセンスの王者としてハックはそうしてできあがる。そのユーモアや悪意はどこに行くのか？この小説はなんのパロディなのだろうか？おそらく児童文学とはなにか？が答えである。

こどもの作り方——チャイルドの『女の子の本』と『トム・ソーヤーの冒険』

慶應義塾大学 大串尚代

1820年代に小説 *Hobomok* で文壇にデビューを果たした Lydia Maria Child は、作家だけでなく、家政評論家および児童教育家の一面を持つ。家庭を切り盛りする主婦の手引き書の嚆矢となる *The American Frugal Housewife* の出版を皮切りに、*The Mother's Book*, *The Family Nurse* など、女性の仕事としての家事、子育て、看護をマニュアル化した Child は、児童向け雑誌 *Juvenile Miscellany* を発行し、子供向けのゲームや詩、物語を集めた *The Girl's Own Book* (1831年) によって、19世紀における児童文学のひとつのあり方を提示した人物でもある。果たして Child が造りだそうとしたのは、いかなる「こども」であったのか。本発表では、*The Girl's Own Book* と対をなす William Clarke による *The Boy's Own Book* (1829年) と照らし合わせながら、19世紀前半のニューイングランドにおける「こども」像を概観することから始め、19世紀後半に登場するトウェインの南部の少年トム・ソーヤーがどのようにこれらの「こども」像を換骨奪胎しているかを考察したい。

「子ども」と「障害」から考えるマーク・トウェイン

金沢大学 久保 拓也

「子どもの身体」と「障害」をキーワードとして、トウェイン自身、そしてその作品について考えたい。

「子ども」は「未完成」で「不完全」な存在であるが、それと同時に、未だにも失っていない「完全」な存在でもある。二つの相反する性質を内に秘めた「子どもの身体」が、彼の目には崇拜すべき存在として映った。だが、人が様々なことを失ってゆく過程を「成長」と呼ぶのであれば、「子ども」を見つめるトウェインの視線には、必ずや訪れる「喪失」を哀れむ、あるいはそれを心待ちにする感情すら読み取れるのかもしれない。

その思いは、繰り返し述べられた「結合双生児」への多大な興味を含む、「障害」に関する記述へも関わってくる。南北戦争で負傷しなかった、あるいはできなかったトウェイン自身もつ、ある種の誇りと負い目という相反しながら同時に存在する感情の表象なのだろうか。二つのキーワードから派生する様々な事象を、積極的に読み取っていきたいと考えている。